



【図7】横隔膜ヘルニアのMRI所見
MRI (T2強調画像)であり、左の胸郭内に胃と腸管が陥入して、肺を圧迫しています。右肺はほぼ正常。



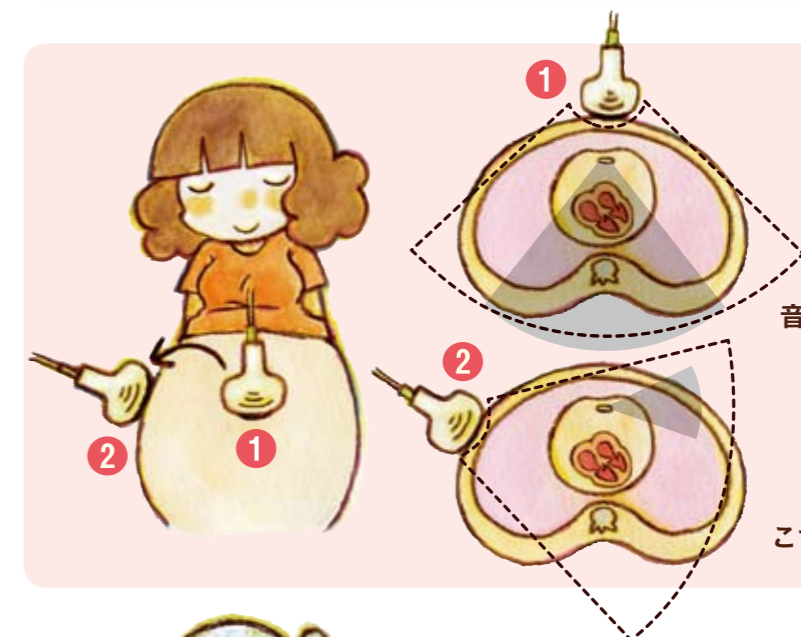
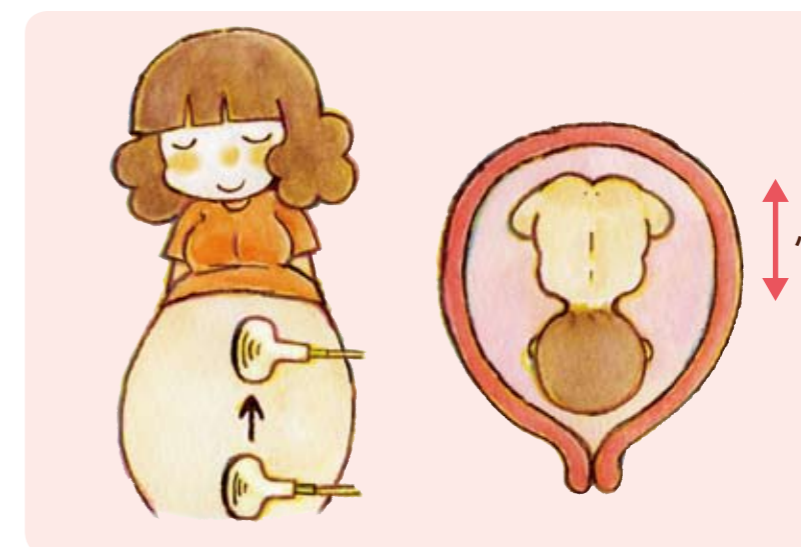
どう話す?

胎児に横隔膜ヘルニアが見つかったとします。超音波検査で胸郭内に胃や腸が認められ、MRIを撮ると片方の肺は小さく縮んでいます（図7）。染色体検査を勧めましたが、希望されずに行っていません。さて、あなたは胎児の生後の状態について両親にどのような説明をしますか？

- ① 残念ですが、赤ちゃんの肺は低形成をきたしているようです。染色体異常の可能性もありますし、生まれた後に呼吸をできない可能性があります。ある程度、覚悟をされておいたほうがよろしいかと思います。
- ② この赤ちゃんが産まれた後で普通に呼吸をすることはかなり困難だと思います。呼吸ができていても脳障害が残ることも考えられます。しかし、とにかく生後に手術をして生きていけることに期待しましょう。
- ③ いろいろな検査では、赤ちゃんの肺の状態は正常とはいえない状態です。しかし、生まれてからのことは、生まれてみて初めてわかることも多いのです。諦めないで、この後も大事にみていきましょう。
- ④ 人は千差万別で、そのことは胎児でも同じことです。事故が起こることも病気になることもあるでしょう。あなたの赤ちゃんには肺の病気がありますが、そのことも含めて普通にみていきましょう。

医師が違えば説明が違うように、人が違えば感じ方も違うものです。上記のどの説明も間違っていないです。医師と母親（あるいは父親）の組み合わせによっては、いろいろな説明があり得ることを知ってください。

まずは正しい情報を提供することです。しかし、どこまで詳細に話すかについては、一方的な説明にならないよう、相手の理解を確かめ納得を得るような姿勢が大事でしょう。



どう使う?

妊娠後期に超音波検査を行うときに、胎児の脊椎は音響陰影によって胎児の観察をできにくくします。そのことは胎児胸部に限ったことではないのですが、やはり胎児心臓を観察するとき、もっとも問題になるようです。今回は、そのようなときにどうすれば胎児の心臓が見やすくなるか、というコツについて説明しましょう。

まず胎児を縦に切った像を出して、心臓を画面中央に置きます。そこでプローブを90°回転させると、四腔断面に近い像が描出できます。胎児の背中が邪魔になるときは、プローブを母親のお腹の側方にすべらせて、できるだけ超音波を胎児のお腹側から当てるようにすると心臓をうまく見ることができるようになります。この方法は、心臓以外にもいろいろな部位を見るときに役立ちます。